小さい者の一人が滅びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。

つのぶえ

社会福祉法人
小羊学園
〒433-8105
静岡県浜松市北区三方原町 2709-12
電話：053-414-1833 FAX：053-438-7707
E-mail kohituji@imix.or.jp
H.P http://www.kohitsuji.or.jp/
発行人：稲 松 義 人
印刷所：ＳＲＳ株式会社
定　価：一部 30 円
2012年7月20日
第 351 号

原発反対

理事長　稲松　義人

テレビで、首相官邸前に全国から数万の人たちが集まって、原発の再稼働反対を訴えていることが報道されました。それも大きな団体が動員をかけて集まっているのではなく、一人ひとりがインターネットなどで情報を得て、それぞれの意思で集まってきており、中には子ども連れの若い母親も少なくないということです。

東日本大震災によって、私たちは様々な点で、これまでの生き方について反省を迫られました。その中でも原発事故をめぐる議論は、大きな課題を含んでいると思います。今回の原発事故のきっかけは、想定を超えた地震や津波だったかも知れませんが、これまでの安全対策や事故後の対応も含めた検証の結果、人災との見解も示されたようです。ちゃんとやれば安全だったということではなく、ちゃんとやれなかったこともふくめて、人間のやることに「１００％安全」はないということだと思います。

確かに人間は、生きていくために危険を冒すこともあります。また、新しい科学技術が開発されるまでには、失敗（事故）の中から積み上げられてきたこともあるでしょう。今回の事故を経験し、原子力発電の技術もさらに進歩していくことになるのかもしれません。代替エネルギーとされる太陽光発電にもきっと課題はあるでしょうし、風力発電の塔が倒れるような事故があるかも知れません。しかし一旦事故になると、関係者だけでなく、その地域の人すべてが、数十年にわたってそこに住めなくなり、自然環境への影響を考えると、人間のみならずそこに生きる様々な生物、生態系にまで影響を与えるような危険を冒すことを、私たちは身をもって体験しているのです。それなのに、なぜいくつかの選択肢のなかからあえてそれを選択しなければならないのでしょうか。

そんな疑問の中で、この夏の電力不足とか、経済活動に対する影響とかいう理由から、停止していた原発が再稼働されました。再稼働するにあたっては安全だと言っていますが、原発事故以前には、福島の原発も安全だと言われていたのです。様々な検証の過程から、経済の豊かさのためと言いつつ実際には一部の者たちが、「富」と「権力」と「名声」に縛られて、原子力政策をけん引してきたことが、明らかにされつつあります。原発反対の意思を表明し行動を起こした人たちは、そのことへの怒りも含め、万が一にでも私たちの生活を破滅に追い込む可能性があるものに対しては、はっきりとＮＯと言わなければならないと思い、それぞれ行動したのだと思います。

社会福祉の仕事は、もともと生産活動ではありません。必要な衣食住があることは社会福祉の実践にあっても大事な視点ですが、原点は一人ひとりの命が大切にされ、みんなが幸せを感じられ、平和に生きていけることが最も大切な目標となります。小羊学園の仕事も同じ使命をもっています。

小羊学園は、重い障がいの中に命を与えられた人たちを支援しています。彼らは、与えられた命を精一杯生きることで社会の大切な一員です。経済的な点で社会に貢献することはできません。むしろ生きていくために多くの経済的な支援を必要とします。

私たちは、彼らとの出会いと日々の関わりの中で、命のつながりの中に生かされていることの大切さを教えられました。科学するのは人間の性でしょうし、物質的な豊かさのために人類が努力してきたことも否定できませんが、人類と地球上のすべての生命の未来を賭けて、それを進めるのは明らかに間違っていると思います。

私があえてここでこのことに触れたのは政治的運動としてではありません。これは、社会福祉を推進するためのソーシャル・アクションだと思っています。市民の意識が変わることは、福祉社会を実現するためには欠くことのできないことです。

ユニットケア
～子ども達が安心して成長できる 生活を目指して～

三方原スクエア児童部　吉田桂子

三方原スクエア児童部（福祉型障害児入所施設）の定員は20名で、学齢児13名、過齢児7名が4つのユニット（内、1つは過齢児のユニット）に分かれて生活しています。各ユニットには個室が6部屋（短期入所用も含めて）と、リビング、浴室、トイレ、キッチン等が設置されており、一般家庭に近い生活環境です。それぞれのユニットは独立していますが、2つのユニットの間にスタッフルームがあり、職員が互いに行き来しながら協力できる構造となっています。

新しい発見、気付きの毎日

学齢児童は、小学1年から高等部3年までの13名で、地域の特別支援学校や普通学校の発達学級に通学しています。小中学生は学校のスクールバスで7時15分に、高等部生は施設の送迎車で7時45分にそれぞれ登校して行きます。

まだ眠くてなかなか起きられない子を何とか起こし、朝食に苦手な献立があり食が進まない子を励まし、「あっ！今日は○○が欲しいって先生に言われてた！」と朝になって必要な持ち物を思い出す子の準備の手伝いをし…。朝はとにかくバタバタしながら登校時間に遅れないように、子ども達も職員も大忙しです。そんな中でも、子ども達に「今日も1日がんばろう！楽しい1日の始まりだ！」と思ってもらえるよう、明るく笑顔で送り出すことを心がけています。また夕方になり下校してくると、学校の荷物や洗濯物の片付け、翌日の荷物の準備等、子どものそれぞれの能力に合わせて目標を設定し、できる限り自分で行なえるようにしています。中には学校から宿題を出していただいており、進んで取り組み始める子もいます。自由時間になると、それぞれの子が今日の出来事を職員にお話してくれます。子ども達としては、早くお話したくてウズウズしているのですが、片付けや準備に追われ、なかなか時間を作ってあげられず待たせてしまうことも多いのです。「こんなことができるようになった」「こんなことがあって悔しかった」「先生に褒められた」など、キラキラした顔で一生懸命伝えようとしてくれる姿は、私たち職員を元気にさせてくれます。また、そんなお話の中から子ども達の課題を見つけられることもあり、大切にしたいと思っている時間です。その他の自由時間は、自分の部屋でのんびり自由に過ごす子、リビングで皆と団欒して過ごす子、職員の手伝いをしてくれようと積極的な子など、それぞれの過ごし方があります。子ども達自身の「やりたい」という気持ちを引き出し、自分から表現することができるよう、それぞれの過ごし方をできる限り尊重したいと思っています。夕食を終えるとひとりずつ入浴し、20時には消灯します。

「そだちの家２」の玄関

各ユニットの表情

3つのユニットの利用者編成は、性別や年齢、子ども達の性格や障がいの特性を考慮して、新しい年度を迎える度に職員が会議の場で検討して決定しています。「のぞみの家2」は、高等部の男児を中心としたユニットです。比較的重度の障がいを持っており、言葉での意思疎通が難しい子が多い事もあり、自分の気持ちを上手に相手に伝える力、自分の身の回りのことを自分でやろうとする意欲・力を育てたいと願っています。「そだちの家1」は、小学部高学年から高等部の男児を中心としたユニットです。児童部の中でも比較的おしゃべりが得意な子どもが多く、子ども達同士で学び合い、指摘し合いながら日々楽しく生活しています。自分の身の回りのこと以外にも、ユニットの中での役割を担う子もおり、誰かのためにがんばる力や気持ちを大切に育てたいと願っています。「そだちの家2」は、女児と小学部低学年の男児が生活しています。女の子らしくおしゃれを意識する一面が見られたり、子ども同士で助け合い、職員が困っていると自然と手助けをしてくれるなど、女性ならではの優しい気遣いをしてくれます。また低学年児ならではの元気いっぱいで活発に遊ぶ姿も特徴です。低学年児には、自分の素直な気持ちを表現したり、わがままを言って甘えるというような、年齢に合った成長を支えたいと願っています。

毎年、退所児や新入所児の入れ替わりに伴い少しずつ生活するメンバーは変わるのですが、それぞれのユニットならではのカラーが作られていきます。それぞれの子ども達が、楽しく安心して生活できるよう、職員同士で情報や意見交換を密にし、課題を改善できるようにしています。

ユニットの支援体制

スクエア児童部は、過齢児の担当も含めて11名の職員がローテーションを組んで支援に当たっています。先にも紹介した通り、1つのユニットには6名の子どもが生活していますが、ユニットに入る一番基本となる勤務が生活勤と呼ばれる勤務で、各ユニットにそれぞれ一人ずつの職員が、起床から就寝まで（子ども達が学校に行っている昼間の時間は長い休憩時間となりますが）担当するようになっています。これは入所施設という特殊な環境の中、生活している子ども達に少しでも落ち着いた環境で過ごして欲しいという願いから、1日をトータルして1人の職員が担当することで、ひとりひとりの様子に目を向けやすくなり、体調や情緒の変化にも早く気付ける事にもつながります。

しかし、各ユニットを一人の職員だけで担当している訳ではありません。下校以降の時間は、各ユニットの生活勤務＋遅番という体制を取り、子ども達の生活を安全に、また少しでも充実させられるよう努めています。その他にも、子ども達を朝学校に送り出したり夕方迎えに行く時間帯や、早退児の対応等、日勤や遅番も配置することで急な事態に対応できるような支援体制を取っています。

リビングで皆と一緒に

ユニットケアの現状・メリットと課題

近年、スクエア児童部に入所してくる子ども達は、虐待からの保護や保護者の疾病による養育困難など、家庭における子育て能力の弱さ（崩壊）が理由で入所となるケースが多くなっています。幼児期に大人の愛情を十分に受けられずに育ってきた子どもの中には、自己肯定感が無く、自分の素直な気持ちを表現することが苦手で、愛着障がいを感じさせるような表れをする子もいます。このような子どもたちにとっては、ある程度固定された職員との安心感のある人間関係の中で成長を支える事が重要です。ユニット定員が6名で空間も広すぎないユニットでの生活は、子ども達の生活に目を向けやすく、自然と子どもと職員の距離が近くなります。家庭での養育が困難で、不適切な養育環境で育ってきた子どもたちには、ある程度固定された職員との安心感のある人間関係の中で成長を支える事が重要です。入所当初には、大人の顔色をうかがい視線を合わせず、大人の気を引くような行動が多かった子どもも、月日を重ねるにつれて、自然な表情でワガママや自分の苦手（弱さ）なところをさらけ出せるようになったり、自分の出来る事をアピールして褒められようとしたりするなど、良い表現方法が見えてくることが多くあります。苦手な事、良くない所があっても、存在を否定せず受け止めていくことと、良くできたことやがんばったことに対して、しっかり認めて褒めるという当たり前の関わりを続けていく事で、子どもに安心感を持ってもらえるのだろうと思います。そんな関わりは、やはりユニットケアという小規模の家庭的な雰囲気・環境だからこそできるのだろうと感じています。

一方で、狭い空間だからこそ、折り合いが良くない子どもたちが同じユニットで生活する場合、どのようにお互いの距離を確保しようかと悩みます。また、6人の子ども達を一日にひとりの職員が担当するという支援体制は、その職員にとって責任が大きく、困難さを感じることも多くあります。職員は勤務に入る際にPHSを携帯しており、2つのユニットはスタッフルームで繋がっているため、応援を呼べる体制になっていますが、実際に子どもの対応に困った時や、とっさの判断が必要になった時などに、相談できる相手がすぐ傍にいないのが現状です。また、職員同士の情報交換・共有の場を持つことが難しく、課題の共有の難しさ、共通した支援・取り組みの行ないにくさが課題であると感じています。月に2回、職員全員が集まって会議を行ない、それぞれの子ども達の様子や支援の方向性、今後の生活の見通し等について話し合いますが、十分とは言えません。勤務の合間や登下校の前後など、時間を見つけながら情報交換や課題についての相談を行なうよう意識はしていますが、この先、どのような工夫ができるか模索してゆく必要もあります。

「自分の部屋」となる個室

幼くして親元から離れて生活するという厳しい現実に直面しながらもたくましく生きている子ども達のためにも、より良い生活環境を整えられるように。また、子ども達が安心してのびのびと成長し、笑顔を輝かせて生活できる毎日となるように。そして、スクエア児童部を退所するときにお互いが笑顔で明るい希望を持てるように。三方原スクエア児童部に何ができるか、果たすべき使命は何であるのか考え続けたいと思っています。

法人内研修の報告

小羊学園では、支援管理者・サービス管理責任者・主任で構成された、支援担当者会議が、支援のありかたや職員の資質向上のための研修会や講演会を企画運営しています。

◎新人研修

6月18日（月）浜北森林公園森の家にて新人職員21名参加。

3ヶ月が経過する中で、それぞれが抱えている課題や悩みをグループワークで共有し、自分が小羊学園でしたいことを見出す作業を行いました。

◎ケアホーム定例学習会

7月12日（木）三方原スクエアにてケアホーム職員11名参加

「僕の暮らし・私の暮らし一緒に考えて」と題し、フェイスシートを使いながら入居者の想いや将来の夢を実現するために、誰がどのような役割を担っていくのか学びました。

ケアホーム研修

三方原スクエア 夏祭りのご案内

日 時　8月10日（金）

場 所　三方原スクエア

◎　第1部　　15：00～18：00
模擬店（焼きそば・おにぎり・フランクフルト・流しそうめん・かき氷など）
アトラクション・ボーリング・輪投げ
新人職員による音楽

◎　第2部　　19：00～20：00
花火大会（清水公園にて）

ぜひ遊びにいらしてください

※ご不明な点は三方原スクエアまで
☎ 414－1833

平成23年度共同募金受配報告

①事業所名　オリーブの樹（わかな）
②受　配　遊戯プール
③総　額　2、285、850
補助額　1、706、250
自己負担　579、600
④受配の効果
夏の時期、プール遊びは子供たちにとって楽しいプログラムです。プールを整備することによって、楽しい活動が提供できます。また、濾過循環ポンプを設置することで衛生面に配慮し、より安全な水遊びができます。
⑤設置時期　平成24年7月中旬
受配にあたり、ご寄付いただいた県民の皆さま並びに共同募金関係者の皆さまに御礼申し上げます。

編集後記

プライベートな話で恐縮だが、先日長野県小布施町の小布施見にマラソンに参加した。今年で10回目を迎えたハーフマラソン大会は、おもてなしの心が盛りだくさんで全国的にも人気のある大会だ。参加してその意味がよくわかった。子どもからお年寄りまで町全体で企画に参加し、一丸となって応援やボランティアをされ、町の結束力が強い。決して大きな町ではないからこそ故の結束力なのか？　福祉の世界に身を置き、地域作りを考えたときに模範となる町を見させていただいた。

まもなく梅雨明けを迎え、夏本番を迎えます。節電も大事ですが、身体がもっと大事です。ご自愛下さい。（F）

小羊学園を支える会

2012年度寄付金報告

6月受付分	235,451円	（24件）
累　計	985,051円	（83件）

小羊学園への寄付金振込み先

郵便振替口座　00800－8－107785
口座名義　社会福祉法人小羊学園
ゆうちょ銀行　089店　当座預金0107785
口座名義　社会福祉法人小羊学園

ご希望があれば、郵便振替用紙をお送りいたします。
下記へご連絡ください。
小羊学園を支える会事務局（鈴木）
三方原スクエア内　☎ 053－414－1833